

平成26年度 附属学校園存続のための特色化にかかわる事業実施報告書

事業の名称	新学習指導要領における保護者や地域・小学校・大学の人材を活用した新しい子育て支援のカリキュラム開発
事業実施代表者名	齊 藤 緑 附属函館幼稚園副園長
実施附属学校名	附属函館幼稚園
事業内容 (実施内容について、 1,000字程度で記述)	<p>附属函館幼稚園では、平成22年度に全国の国立附属学校では初となる預かり保育「附幼きりのこきっず」の取組を開始した。以来園のスタッフや保護者・地域・小学校・大学の人材などが協力して、「預かり保育」や「子育て支援事業」を展開することによって、「通常の保育活動」と「預かり保育活動」の有機的な連携を図り、その教育効果を高めることや、保護者の互助によるより豊かな子育て支援の場と経済性を兼ね備えた新しい「預かり保育」の形態を次の4つの場として提案し、事業を展開している。</p> <p>①「家庭生活との連続性を考えながら、家庭的で落ち着いた雰囲気の中で過ごすことができる場」</p> <p>②「教育課程に関わる保育時間や家庭では経験できない活動、かかわりを経験することができる場」</p> <p>③「子育てに関する情報を得、保護者同士が気軽に相談でき、保護者の子育てを具体的に支援する場」</p> <p>④「幼稚園と家庭、保護者が在園児全員の成長にかかわる連携的意識を醸成する場」</p> <p>これらを受けて、「わくわくきっずの日（異年齢の友だちとともに好きな遊びをしながら、家庭的な雰囲気ですごす日）」、「イベントの日（お母さん先生や外部講師の方などが来て、事前に企画した楽しい活動をして過ごす日）」、「レッツ講座の日（外部講師が来て、何回かにわたり、子どもが楽しく取り組みながら習い事をする日）」、「子育てトークの日（子どもを園に預かりながら、子育てについて日頃から気になっていることを、先輩お母さんと気軽に話し合える日）」、の4つの具体的な形態を作って「預かり保育」を行っている。</p> <p>今年度は特に、②の場として「イベントの日」と「レッツ講座の日」を多く設定し、幼児期においてより多様な体験ができるように充実をはかった。また、附属旭川幼稚園が8月から始めるにあたって、情報や資料を提供した。</p>

<p>成果と課題 (活動の成果と課題について、500字程度で記述)</p>	<p>成果としては、各月の計画の中にバランスよく4つの「預かり保育」の形態を配置し、基本的に週2回（火曜日と木曜日）実施した。総回数53回、のべ1133人の園児が参加し、1回あたりの平均が22人、最大時には45人の参加があった。イベントや講座では、キッズエアロビクスやバレエの体験、外国人の先生と外国語を使ったゲームなどを実施した。お母さん先生では、英語で遊ぶ講座とダンスを行う講座、読み聞かせが各2回実施された。大学の吹奏楽団員が訪問し音楽教室を開催、サッカー部員が幼児にボール遊びを楽しませながらサッカーを行う教室を3回開催した。音楽鑑賞ではフルートやサクソフォンや歌の先生をお招きし、子どもの興味・関心をひく演奏を聞かせていただいた。茶道体験（2回）や日舞などもあり、日本の文化に親しむこともできた。</p> <p>しかし課題としては、ゲストティーチャーがボランティアの形で来園している点である。また予算内では6月～12月の半年しか実施できず、今年度並みの予算だと大変厳しい。</p>
<p>今後の発展性 (残された課題の解決方策及び取組の方向性について、500字程度で記述)</p>	<p>保護者アンケートや「預かり保育」を利用している子どもたちの声などから分析すると、保護者も子どもも「預かり保育」に期待しているのは、「レッツ講座の日」や「イベントの日」などの習い事的な要素である。特に年長組の保護者や子どもにその傾向が強い。しかし少子化が進み家庭に帰ってからも安心して遊ぶことができる環境が少なくなっている昨今、様々な遊びを通じた異年齢の交流にも「預かり保育」の良さがあると思われる。単なる延長保育と考えずに、教育的効果を発信していきたい。それと同時に、就労している母親からは、「4月からの開催」「週2回以上の開催」や「朝預かり」の要望もよせられている。さらに本園では非常勤講師が「預かり保育」を担当しているが、講師やゲストティーチャーを伴う内容は日程調整やおやつの準備も含めて担当している教諭の時間外の負担も大きいことから、今後は特色化の予算（60万円程度）の他からの予算組も是非お願いしたい。</p>
<p>事業の公表状況</p>	<p>HPで公開・園児募集案内で紹介</p>